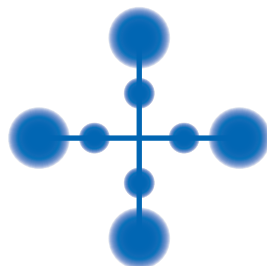


生物の生息空間としてのネットワークの確保

- 生物種や生態系の保全のためには、生息域のネットワークを適切な形で確保することが必要です。
- 生物種や生態系の保全のためには、国際自然保護連合（IUCN）が提唱している「生物生息空間の形態・配置の6つの原則」である「広大化」「団地化」「集合化」「等間隔化」「連結化」「円形化」を考慮して、環境要素のネットワーク化を図ることが重要です。

● 手引きP35「4.2.3 水域及び緑のネットワークの確保（ネットワークの原則）」参照

優(better) 劣(worse)		生物生息空間の形態・配置の原則
広大化		生物生息空間は、なるべく広い方が良い。 タカ、フクロウやキツネ等高次消費者が生活できる広さが一つの目安です。 生物の多様性に富み、安定性が増し、種の絶滅率が低くなります。
団地化		同面積ならば、分割された状態よりも一つの方が良い。 多くの種は一塊の広い地域であって初めて高い生存率を維持できるため、生息空間が幾つかの小面積に分割されると、生存率が低くなります。
集合化		分割する場合には、分散させない方が良い。 生物空間が接近することで、一つの生物空間で種が絶滅しても近くの生物空間からの種の供給が容易になります。
等間隔化		線上に集合させるより、等間隔に集合させた方が良い。 等間隔に配置されることで、どの生物空間も、他の生物空間との間での種の良好な交流が確保されます。線上の配置は、両端に位置する生物空間の距離が長く、種の交流を難しくしてしまいます。
連結化		不連続な生物空間は、生態的回廊(コリドー)で繋がった方が良い。 コリドーの存在より、生物の移動が飛躍的に容易になります。
円形化		生物空間の形態は、できる限り丸い方が良い。 生物空間内における分散距離が小さくなります。外周の長さも小さくなり、外部からの干渉が少なくて済みます。



高次消費者が生息可能な良質な生物空間をより広い面積で、より円形に近い形で塊として確保し、それらを生態的回廊で相互に繋ぐことが、最も効率的な生物の生息空間の形態及び配置の仕方です。